

4月27日(月)

おはようございます。

「サンデーモーニング」という毎日放送の番組の、スポーツニュースのコーナー、諸君も知っていますね。「喝(カツ)」とか「あっぱれ！」とか評価する番組です。そこで少し前に、元野球選手の張本さんが、サッカーの三浦知良選手が三試合で二得点あげたというので、本来だったら褒めなくてはならないのだけれども、喝だ、もういい年なのだからJ2でいつまでもしがみついて点を取ったといつてのぼせ上がってはいけません。喝だ、もうはやく辞めなさいということをやった。そんなことを言うと批判がものすごく来ますよと関口宏も言った。案の定その後、ネット上で話題になり、なんということをやったのだと批判された。

僕も張本は番組を辞めなくてはならないのではないかと、あるいは謝罪をしなくてはならないのではないかと考えていたのですが、そうはならなかったのです。なぜそうならなかったのかというと、張本に批判された三浦知良が、これは自分への批判ではなくて、激励だと思っている。そう思って頑張ろうと思うと言って騒がなかったからです。それでネット上も沈静化したのです。

そのことで三浦知良は日経新聞からインタビューを受けていて、次のように言っている。プロフェッショナルというのは、すごく高い要求を求められる、それからすごく厳しい批判も受けることを覚悟しなくてはならないものだ、場合によっては、自分はこれでもう続けていけない、辞めなくてはならないというくらいのプレッシャーを自分にはかけないと、成長していくことはできないものだ。日本人のファンはその面では割と優しいほうだけれども、自分は若いころはブラジルにおり、そのあとわずかな期間だったが、ヨーロッパのセリエAにいた。そこで自分が学んだことは、批判というものは、必ず真理を含んでいるということだった。

たとえば、ぜんぜん自分の試合を見たことのない女の子が自分の試合を見て、ぜんぜん面白くなかった。大したことなかったというふうに批判したとして、それは彼女がサッカーを知らないからだというふうに相手のせいにしてしまうと、もう自分は成長しない。もちろん自分には自分なりの考えというものはあるのだけれど、批判は一面の真理を含んでいるものなのだ。いま自分はJ2にいて、張本さんには二軍だと言われたけれども、私はそんなふうに思っていない。J1を目指す新進気鋭の若いエネルギーにあふれる選手たちと一緒にやっていかなければならないのだが、そこでは計算をはずれたような、情熱的なプレーがたびたび出るようなステージであって、自分はJ2の試合はおもしろいと思っている。

しかし、はじめて観戦にきた女の子が自分たちのプレーを見て、おもしろ

いなあというふうに思わすのでなくてはならない。それがプロの仕事なのだ。

批判というのはどんなものでも、必ず一面の真理を含んでいる。だからそれを的外れであると切り捨てるのも、不愉快だと言うのもよくない。その批判にさらされていくとき、そこに含まれている一面の真理をちゃんとくみ取って、それを自分の成長の糧につなげていくのがプロだと思っている。だから僕は張本さんが言ってくれたことについては、自分かまだまだ成長していくのでなくてはならない糧なのだと考えて自分はこれから頑張りたいとコメントした。

ああほんとにそうだなあ、三浦は立派だなと思いました。人から批判されたりすることはあるものです。もちろん、それは的外れだということもあるでしょう。しかし批判が一面の真理を含んでいることは、本当です。その受けた批判のなかの一面の真理からきちんと自分が成長できる糧をくみ取れるかどうか、プロかどうかだということでしたが、この話はそれだけで止まらないはないと思います。わたしたちが、きちんとした人間として、成長していけるかどうかの、ポイントではないかと思うからです。この話がおもしろかったので、紹介してみました。

諸君等も自分の心に照らしてみてください。参考にできることがあるはずです。お母さんや先生、友達から批判を受けたときに、それは違うと思うのもけっこうだが、しかしながら、そのなかに一面の真理はある。その真理から自分は反省して、どういうふうに自分が成長していく糧にできるかどうか、「ほんまもの」の人間として成長していけるかどうかの境目だと思います。ぜひ参考にして実践してもらいたいと思います。

今朝の話はこれで終わります。

( 学校長 )